



鳥越神社氏子  
十八ヶ町睦会  
七十年の歩み

睦 睦 睦 睦



昭和五十七年五月

鳥越神社氏子

十八ヶ町睦会

# 七十年の歩み

鳥越神社の祭礼は、古い歴史がありますが、戦後年ごとに盛大になり、今日ではマスコミの力もあって、国内はもとより、外国からも多くの人が、鳥越の夜祭りを見物に来る様になりました。これは明治四十五年に、十八ヶ町睦会を創立した方々の御苦勞、御努力は言うまでもなく、七十年にわたる代々の会長、総代を始め、多くの役員、会員の方々の和と力の結集の成果であると思います。

### 昔の祭礼

「内原文のまゝ。約百九十年位前の記録、東都歳事記に「浅草鳥越明神八日より賑へり別当長樂寺神主鏑木氏、古来は六月十一日なり、中古改めて九日と

す、寛政八辰年迄は毎年、産子の町々より、だし、練りものを渡しけるが同じ年より中

絶す。神輿は隔年産子の町々を渡す」とあり「早朝本社の前より南鳥越町」で始まり極

めて詳細に渡御巡路を記し、「松浦家、井伊家御家敷の間七曲り通り、甚内橋を渡り本

社へ帰輿あり」宮出しより、宮入りまで、克明に記録されています。「寛政八年の番組産子

町々左の如し、町数二十二町、山車数十七本に、練りもの出しけるなり。

一番 浅草寿松院門前 二番 同所

三番 猿屋町 四番 同代地

五番 阿部川町 六番 新寺町 三ヶ寺門前 十二ヶ寺門前

七番 新寺町門前の内 八番 同

九番 同 十番 浅草花蔵院門前

十一番 下谷小島町 十二番 浅草元鳥越町

十三番、十四番、十五番、十六番、十七番、何れも同町の内より出づる」鳥越神社の祭礼は昔から盛大だった事がわかります。明治の渡御行列の記録を見ましても想像を絶する盛大さです。

**睦会の誕生** 明治二十六年の記録によりますと、宮元睦、各町睦、とあるので、町

別の睦は古くからあった様です。明治の末に鳶職「頭」かしらの祭礼を中心とする組織、鳥

越八ヶ町、宮元、向柳原、猿屋町、小島町、七軒町、永住町、阿部川町、栄久町が出来、それが基礎となって、阿部川町生れで、永住町の材木商、福山安太郎氏「当時二十五才」

が氏子各町睦会や有力者と計り、氏子二十数ヶ町の睦会が合同し、十八ヶ町睦会が誕生したと言われています。又、元鳥越町睦会の七輪商、今井政吉氏は、明治十八年より、明治三十年頃まで存続して、神社祭典の奉仕をしていた明神講（会員数五十余名）の世話役で人望のあった人だったそうです。祭典の事などにも詳しいので、この今井氏を、福山氏が初代会長に推したと言うことです。年長の人を立てれば睦会の運営もうまく行くのではないかという配慮があったことと思われまます。「渡り」其の他祭典行事の方式一切は、今井、福山両氏、他の人々がそれまでであった。各町睦の方式と、神田明神の祭礼の方式などを参考に作り上げたと言われています。最初は会長制で発足しました。

### 創立本部役員と町代表

会長 今井 政吉氏 元鳥越町 七輪製造

宮内省御用達

副会長 福山 安太郎氏 永住町 材木屋

副会長 菊池 銀次郎氏 阿部川町 下駄箱

指物

副会長 佐久間 喜三郎氏 栄久町 材木屋

副会長待遇 早川 永太郎氏 北松山町 棒屋

右の外、宮元の稲葉、小島町の中島の諸氏などが本部役員となり、各町の若い衆頭が代表になりました。

**睦会のマーク** 創立以来の睦会のマークは、片仮名の力の字八ツを獅子毛にして中に十の字を入れたもので、初代会長がなかなか、器用な方で自分でデザインしたという事です。そのものずばりで、いかにも睦会らしいマークです。傑作だと思います。

**お鍵番** 十八ヶ町睦会発足前は、宮元の「頭」が神輿庫の鍵を、あづかっけて、とても権威があつた様です。それまで本社神輿の渡御のある本祭りの時だけ、軒花を打っていました。影祭りのときも軒花を打たせる事を条件に神輿庫の鍵を十八ヶ町睦会に、渡したという事を古い人から聞いています。

**連合渡御** 大正四年十一月に、大正天皇の御即位式があり、奉祝のために、二重橋

まで連合渡御をやろうという意見が出たが、とても無理だという反対が出て、上野池の端一周という事になり、下谷神社及五条天神にそれぞれ渡りを付け、渡御が行われました。氏子各町共ほとんど総出で参加し、空前絶後の盛大さだったと聞いています。

十一月十五日に新堀端に集合して不忍の池を一周帰輿。その前年に第一回の連合を行っているので、二回目の連合になります。此の連合が動機となつて、氏子各町及十八ヶ町睦会の団結が一層強固になつたと言われています。深川八幡の連合を参考にした様です。以後影祭りの年の行事になりました。

**渡御巡路地図** 睦会として巡路地図を作つたのは、大正五年に現睦会顧問松本亀松氏が赤坂日枝神社の山王祭りの渡御巡路地図を参考にして、製作したのが最初です。

**お揃いと五日間の祭礼** 睦会としてのお揃いが出来たのは大正六年頃で、それまでは各町まちまちでした。神社の大祭日は九日で、前後二日計五日間行われましたが、世間の景気が悪い年は三日間の事もありました。本社神輿は毎日帰輿せず、其の日の最終町の御飯屋に駐輿して翌朝、隣町に渡るわけです。

## 関東大震災

大正十二年九月一日の関東大震災で、江戸時代に出来た本社神輿は神輿庫と共に焼失、直後にバラック神輿といわれた間に合わせの神輿が出来て、昭和二年まで昇がれました。

**本社神輿新調** 通称千貫神輿と言われる現在の本社大神輿は、昭和三年に阿部川町の神輿師の手で造られました。

木地師 牧野田 志賀

金物師 竹野内 正文

鋳師 星野 亀吉

木彫師 西村 雅之

塗師 竹縄 直吉

の各師が文字通り精魂込めて造り上げた他に類のない立派な御神輿です。中でも木彫の西村雅之師は、日本彫刻界の巨匠で、西郷さんの銅像などの作者、蔵前に居た高村光雲師（高村光太郎の父）の門下、山本瑞雲師の高弟で、文展、帝展等で活躍した一流彫刻



家です。塗師竹縄直吉氏は、後に睦総代になっています。神輿の木地は余りに大きいので阿部川町の牧野田師の仕事場では出来ないのです、神社境内に細工場を建て、神樂殿の下なども使って製作しました。牧野田師以下全員が毎朝必ず入浴し、心身を浄めて仕事に当たっていたそうです。用材は檜、樺、赤檜、等で当時の睦会の最高幹部、福山安太郎、佐久間喜三郎、前田治八郎、の三氏がいずれも材木商です。厳選を重ねた材木が使われました。又睦幹部や会員、各町の人々が、入れ替り、立ち替り、御祝儀などを仕事場に持参して、いい御神輿を造ってくれるように、頼み激励していたと言う事です。立派な御神輿が出来ないはずはありません。

**神社復興**　大正十二年八月に老朽化した本殿及び社務所を、改築のため、取り毀した直後、九月一日の大震災のため、氏子の大部分と共に神輿も炎上しましたが、町の復興は意外に早く、昭和に入ると、お祭り気分も横溢、神社建築用の材木は幸いにも、焼失をまぬかれたので、昭和四年十二月七日地鎮祭、同六年、社殿、同十年、社務所の上棟式となり、工事も順調に進み、昭和十年十一月に竣工、総費用、二十七万六百三十九

円五十二銭、その内、現在もある神輿庫の建築費は五千六百二円四十五銭となつています。

### 睦会員の数

十八ヶ町睦会発足当時は、六、七十名位の会員数でしたが、後各町共、五十軒に一人位の割で計百五、六十名位にして、余り増やさない方針だったようです。会員が増加すると事務も繁雑になり、又、会の統制上や役員選挙の問題など色々な理由があつた様です。

睦会員は大店の旦那もいましたが、大部分は江戸っ子気質の職人さんが多かったので、和を保つため、町同志の喧嘩が表沙汰になつたりした場合、睦会員全員に、一杯飲ませるきめなども最初のうちはあつたそうです。

### 渡御時間の厳守

昭和十五年が紀元二千六百年に当たるといふ事で、国を挙げて、奉祝行事が行われる事になり、神社の大祭もこの行事の一環として、参加する事になりました。睦会幹部は、ただ威勢よくお祭り騒ぎをやっているだけではいけないといふ事で、これを機会に、渡御時間を厳重に守る事にしましたが、いざこれを実行するに当り、大

変な苦勞をしたと聞いています。しかし又それが睦会の質的向上にもなり、現在の正確無比の渡御になったと思われれます。渡御が行われたのは、当時の明治節十一月三日で、とても寒い日だったのを覚えています。この年東京オリンピックが行われる事になっていましたが、支那事變のため中止になりました。

**十八ヶ町奉賛会** 昭和十二年に始まった支那事變が永びき、国の内外の情勢も緊迫して来たので、睦会会長前田治八郎氏は、会の體質改善強化を計る目的で、睦会を改組する事になり、昭和十六年十一月睦会は「鳥越神社十八ヶ町奉賛会」となりました。

初代会長は 紅 林 総太郎氏。

十六、十七、十八年と三年間本社神輿渡御は行われませんでした。

一六年十二月八日に太平洋戦争が始まり、神輿を出すどころではなかった事も事実です。この時会員百二十余名。

### 東京大空襲

昭和十九年三月九日、十日B 29による大空襲で、東京下町はほとんど焼失、氏子も壊滅的打撃を受け、多くの方が焼死しました。神社も神輿庫と神樂殿を残

して炎上してしまいました。八月十五日敗戦、十六日に宮司鍋木建男氏は神社焼失と、武運長久を祈って戦地に送り出した氏子出征軍人の戦死について、神職としての責任感から、神樂殿に昇り、古武士の作法通り、壮烈な割腹自刃されました。乗馬で神輿に随行し、氏子の人々に挨拶されていた宮司の笑顔は、今でも忘れる事が出来ません。この方が在世でしたら、後の不祥事は起らなかったと思うと誠に残念でなりません。本当に惜しい方を失くしたと思います。

十八ヶ町奉賛会解散 昭和二十一年五月三十日。

鳥越神社連合敬神講結成と睦会再編 旧奉賛会員は敬神講の世話人になり、その中

より旧睦会員は新生睦会を発足させました。敬神講は神社の運営、睦会は祭礼の執行を受け持ち、車の両輪の様に鳥越神社の発展拡大に努めて今日に至っています。

戦後第一回の本社神輿渡御 昭和二十三年六月十日敗戦後最初の本社渡御が行わ

れました。戦災による焼土が道路の両側に土手の様に積まれて、相当広い道でないと渡御は出来ませんでした。渡御の先頭に、シャベルで焼土を取り除く係がいて道を作りな

がら進むわけです。鉄片や瓦、瀬戸ものの破片などで足を切るなど本当に大変でした。食物もろくになかった当時ですが無事宮入りしました。

**睦会再建** 祭礼終了後、戦前の様な睦会を再建しようという事になり、昭和二十三年秋復活する事になりました。

会 長 紅 林 総太郎氏

副会長 日 野 浩 司氏

副会長 田 中 新一氏

**鳳輦の渡御** 昭和二十六年、前例のない鳳輦の渡御が行われました。どこかの神社から借用したものと思います。

**総代・会長・幹事** 発足した時より、いろいろの事情のためと思いますが、会長、

総代、会長、総代と何度も幹部の名称が替っていますが、昭和二十六年より、総代制が定着しました。

総 代 紅 林 総太郎氏



総代 日野浩司氏

総代 田中新一氏

総代兼会計 藤沢康氏

総代 鈴木正之助氏

庶務 鵜原元一。庶務 荒井政雄。

会計 佐久間大吉。会計 小林四郎。

監査 方伊儀銀次郎。監査 坂兼光の諸氏。

この年に幹事制度が出来ました。

幹事長 飯塚隆吉。幹事 林春吉、黒川鶴蔵、橋本九賀男、齊藤三代吉、富塚晃、杉本新八郎、長谷川太郎の諸氏。

町神輿劇場に出場 昭和三十年六月二十四日～二十六日の三日間、第五回舞踊百扇会が東宝劇場で行われ、舞踊は松本亀松先生演出、二長町の神輿出場、睦会特別出演。

神社神輿修復 昭和三十一年六月七日 三筋土屋工匠宅で修復中の本社神輿完成、

睦会員の奉仕で神社に還御。

社務所、落成と渡り 昭和三十四年六月三日、神社社務所落成、睦会発足以来行われていた代表外数名が互いに全町を回る「渡り」を社務所落成を機会に、大広間で、挨拶して手拭を交換する渡り式に替りました。

創立五十周年記念 昭和三十七年二月、鳥越神社氏子十八ヶ町睦会創立五十周年記念事業運営委員会が結成され、六月に祝典が盛大に行われました。境内にテントを張り祝宴、会員大多数出席。

委員長 小林 四郎氏

副委員長 佐久間 大吉氏

副委員長 林 春吉氏

副委員長 鍋田 栄治氏

副委員長 長谷川 太郎氏

東京オリンピック前夜祭 昭和三十九年十月世界中より東京オリンピックに参加

した選手役員を、後楽園野球場に招待して行われた。前夜祭に、鳥越神社の氏子町神輿も多数参加して、外人選手も飛び入りで昇ぐなど、国際親善に大いに貢献しました。

**NHK故郷の歌まつり** 昭和四十三年三月八日、NHK第一スタジオで行われた故郷の歌まつりに本社神輿出場、睦会員が肩抜風通お召のお揃いを着て参加、西郷輝彦、悠玄亭玉介、など芸能人多数参加、司会宮田輝アナウンサー、当時はビデオどりを行い後日放映。

**商工会議所百年祭** 昭和五十三年十月二十二日、国立競技場に於て、天皇陛下台臨のもとに行われた、商工会議所百年祭の全国郷土祭りに他神社の神輿と共に、本社神輿参加、多くの神輿の中で、ずば抜けて大きく立派な鳥越神社の御神輿に対する感嘆の声が観覧席からも聞こえ、誇らしく感じました。睦会員多数参加。

**敬神会総代渡り式に参加** 昭和五十五年六月この年より敬神会総代の五名の方が睦会の渡り式に参加する事になりました。

**消防百年祭** 昭和五十五年十一月二十七日、天皇陛下御臨席のもとに、後楽園球場

で行われた消防百年記念式典に、日本全国の祭礼、民謡踊り等と、東京代表として参加。菊屋橋、永住町、小島一、二長町、浅草橋三、鳥越一、の各町の大人神輿六基出動。睦会員全員参加。江戸ツ子の心意気を見せました。

**鳥越神社の御名称** 昔からとりこえ神社というのが正しいと言われていました。猿屋町産れの直木賞作家、安藤鶴夫氏も「日本のまつり」の中で「近頃とりこえと濁る人が多くなったが、これは、あやまりである澄んでとりこえが正しい」としています。神社の御名称は正しく発音したいと思います。

**どんど焼** 以前は、荒川土手や堀切菖蒲園の近くまで運んで行った事もあるそうですが、神社境内で行うのが恒例で、毎年睦会員の手で行われています。近頃はマスコミの取材も盛んで外人の親子連れなども多数参加盛況です。

**形代流し** 昔は多くの神社で行っていたこの行事も現在、都内で行っている処は少なくなりました。鳥越神社のこの行事は全国でも最大の規模です。戦前は形代を流した後、船頭が投網を打ち、獲れた魚を天ぷらや、さしみにして貰い、鱈腹食べた上、バケ

ツに一杯づつ全員に、海老のお土産がついた事もあったそうです。

海もきれいで、魚影も濃かったのでしよう。昭和五十五年の時は神田川の船上から見ると大きな鯉や金魚が丁度産卵期で水面すれすれの処でからみ合っていて、玉網で三十糎位の鯉が何匹もすくえました。多くの人の努力で川も海もきれいになって来ました。又形代流しの時に投網が出来る様になるのも近い事と思われれます。

**睦会の今後** 七十年間の輝かしい伝統を、大切に守ると共に、よい事は採り入れて行き、鳥越祭りを増々盛大なものにするため、睦会の名の通り、和を大切にし、創立当初の様に年長を立て、よい後進を育み、次の世代につなげて行くのが私共の責務だと痛感致します。

**睦会創立七十周年記念事業** 昭和五十七年三月十一日、記念事業実行委員会が組織されました。

実行委員 総代 長谷川 太郎氏

実行委員 総代 小島 政 夫氏



実行委員 総代 君塚嘉一氏

実行委員 総代 谷口長義氏

実行委員 総代 鹿島幾平氏

実行委員 幹事長 阿部忠利氏

山口喜久。高橋信夫。渋江勝治。森田卯金二。伊藤竹治。平井元司。○江川悌司。飯田

弘。平野俊作。松本芳之助。島村吉衛。茂上豊二郎。岩崎威。○石井栄吉。砂押吉雄。

真中英雄。田島亀太郎。木下健治。恒川金之助。高階厚三。後藤哲夫。中沢貞雄。川西

惟隆。山口正夫。○沢野次郎。大川幸太郎。牧田弘。○久保田辰己。長谷川真三。井上

衛。○茂木正明。大熊敏靖。小川一正。田中次郎。○伊藤安次。以上四十一名の諸氏。

### 睦会創立七十周年記念式典

昭和五十七年五月二十三日（日）正午開会。神社境内

に天幕を張り、境内及社務所で、テーブル立食パーティー。敬神会総代来賓多数。扇子、手拭、バッジ、紅白餅の記念品が全員に渡り、二十六年以上の永年勤続会員に感謝状及額が贈られます。

十八ヶ町睦会より、本社神輿の大化粧綱の奉納と、敬神会総代、睦会顧問佐久間大吉氏より本社神輿の舁ぎ棒二本の贈呈式が行われます。

各町別睦会員、全員の写真入り名簿作製

十八ヶ町睦会七十年の歩み作製

十八ヶ町睦会七十年の歩み編纂委員

阿部川睦会代表 大川 幸太郎

## 編集後記

睦会七十年の歩みを書く様にと長谷川総代より、お話しがありました時に、大分迷いましたが、先祖代々の氏子でもあり、何かお役に立てばと思い、書かせて頂く事にしました。しかし浅学非才、思う様に筆も運ばず、誠にお恥しい次第です。思い違いや間違いもあるかも知れません。御叱正頂けますれば幸いです。五十年誌。戦後十五年の歩み。と重複する処もありますが、御了承下さいます様、お願い申し上げます。

使わせて頂いた資料

松本亀松氏編纂、十八ヶ町睦会五十年誌

藤沢康氏編纂、十八ヶ町睦会戦後十五年の歩み

平地助太郎氏編纂、浅草阿部川町史

鳥越神社復興売成記念帳、昭和十一年発行

睦会顧問佐久間大吉氏始め多くの方々に御助言賜りました。心から御礼申し上げます。

阿部川睦会代表 大川 幸太郎

二 長 町 長谷川 太郎

昭和五十七年五月 十五日印刷

昭和五十七年五月二十三日発行

著 者

鳥越神社氏子 七十年の歩み編纂委員

十八ヶ所睦会

発行者

鳥越神社氏子十八ヶ町睦会

印刷所

万壽堂 吉川印刷所

印刷人

吉川政利

台東区元浅草二丁目六―四

電話八四四―三四五二